

1929年 昭和四年

一月一日（火）

殷殷たる除夜の鐘鳴を界に昭和参年は永遠に去り、昭和四年となる正月だ。如何に吾人の
耳朵に快よく響く事よ！！

当に吾人は此清新なる意気と鐵石の意志を以て事を為す可きである。徐々に正月に溺れ満
腹するが如き愚を為してはならぬ。

八時半より一同食堂にて吉例の御雑煮で新年を祝う。今年は御馳走甚だ多し。但し其の味
如何は？ 新春の意気もて年の数だけ餅を食せる新人あり。

午前学校に新年の賀式に参列する者あり。各自 [読解不能]禮に出ず。

一月二日（水） <宮部先生宅にて多分の御馳走を戴く>

平川副舎長風邪の気味にて午後より ず。今朝の寒気甚しなりと故なるべし。

、、宮部先生の宅に招待せられて舎生一同参る。多分の御馳走あり。然れども新人にして
遠慮して一向平常の手腕を振わざる者あるは遺憾なり。

カルタ、トランプに打ち興じて退去したるは正に十二時過ぎなり。

先輩奥田氏、亀井氏、今井氏等亦共にあり。

一月三日（木）

雪降る。平戸君、青山温泉へ向け今朝出発す。雪霏々〔ひひ？〕として降る。

一月四日（金）

雪依然として降る。高さ二、三尺積る。

一月五日（土）

測候所の発表に依れば数十年来の大雪との事なり。今晚畑君帰舎さる。

一月六日（日）

ノルウエー・スキー選手、ヘルセット中尉、コルテルード、スネルスルード来札、北海道
に於けるスキー・コーチを兼ねて秩父宮シャンツェ建設候補地を選定せんが為なり。

青山温泉にスキー享樂に赴きし平戸君今晚帰舎。

一月七日（月）

予科二学期試験施行す。施行せず云々の流言あり。予科ボーイ落ち着かず。

一月八日（火）

本日より第三学期開始。新しい希望と理想とを以て大いに所期の目的に向って精進せられ
ん事を希望す。予科試験十日より行わる予定なり。

晩野村君帰舎さる。今朝坪田君帰舎さる。

一月九日（水）予科休み。

一月十日（木）予科二学期試験開始さる。緊張の気見えず。今朝土井君帰舎。

一月十二日（木）

インターカレッジ・スキー大会、三角山にて開催さる。

四十キロ米に北大、早大十一点を占む。勢い伯仲し劈頭より接戦す。複合十八キロ米北大、
断然優勢を示す。

一月十三日（日）

インターカレッジ・スキー大会二日目。今日より北大断然リードし、他の追従を許さず。
ジャンプに本学神沢三十米の新記録を作り、オリンピック選手の貫禄を示す。

一月十四日（月）

十八キロ米、三十二キロ米リレーに優勝す。

総得点、北大六十一、早大三十、以下は数点のみ。

第二回大会も斯くして北大の大勝となり、秩父宮賜杯を獲得す。奥手稲に行きし平戸君帰舎。

一月十五日（火）

予科試験終了。此の五日間閉じ込められし鬱憤を晴らす可く皆スキーに出掛ける。晚笹部君頭を光らして帰る。

一月十六日（水）

大塚君小樽へ。蓋しノルウェー選手のスキー見学に赴きしなり。大塚君小樽に泊る。

一月十七日（木）水産試験終り。これで全部試験終了す。

十八日（金）予科、本日より授業あり。今晚高松宮殿下スキーを為さるる為来札せらる。

一月十九日（土）

高松宮、一中雪戦会へ御成りになる。本日より全道スキー大会行わる。

一月廿日（日）

舎生皆スキーを享樂に行く。火薬庫シャンツェにて高松宮台覧のジャンプを見る。北大選手及びノルウェー選手なり。

皆見事なり。就中、コルテルド選手の飛躍振りに皆拍手す。中島ポンドのカーニバルを見に赴ける者多し。

一月廿二日（火）高松宮手稲山に御登山遊ばさる。寒気甚し。吹雪も。

一月廿三日（水）

月次会委員発表あり。委員左の如し。

本間、川原、広瀬、寺岡君

高松宮殿下、石切山より秩父宮ヒュッテに赴かる。

雪降る。温度、急に降下す。

一月廿四日（木）

本日決算を行う。前学期委員の計算粗略と、石炭代 積立金新に徴集の為三十円八十七銭となる。 < 25日記事空白 >

一月廿六日（土）

今朝高松宮殿下御退道遊ばさる。

月次会を行う。宮部先生御都合あり、出席せられず。亦先輩諸氏の出席せらるるものなし。

本月の月次会は至極閑散にして、例の如く議論沸騰する事なく、あっさりと終わる。

会后皆かるた等に精を出して活躍す。

一月廿七日（日）

平戸、野村、村津三君、三段山に赴く。村津君、平常の大言に似ず完全にへバると聞く。

彼一人披露して力なく帰る。

一月廿八日（月）雑誌「櫓の音」原稿を募集す。

一月三十日（水）寒気甚だし。零下廿度に達したる様なり。

一月三十一日（木）

猛烈なる寒気なり。所謂しばれる事甚し。樹氷咲く。校庭のエルム、、、[ママ]樹氷を以

て被われ美観を極む。

本日の温度亦レコード破りにして大正十一年の零下二十七度を突破す。正に零下二十八度五分なり。暖国の人の想像も及ばざる寒さなり。 < 2月1日記事空白 >

二月二日(土) < 舎内ピンポン大会 >

今晚例の如く舎内ピンポン大会を開催す。午後六時より先ず紅白試合を行う。

結果左の如し。

| | |
|-----|-----|
| 紅軍 | 白軍 |
| 土井君 | 大塚君 |
| 後藤 | 三島 |
| 本間 | 川原 |
| 寺岡 | 村津 |
| 畑 | 平川 |
| 広瀬 | 坪田 |
| 平戸 | 野村 |
| 笹部 | 渡辺 |

此の試合大塚君平常の技量を發揮せず惜しくも敗る。尚村津、坪田両君の奮闘大いに稱賛に値す。

両軍互に伯仲せしも白軍の大將渡辺君、畑君に打止められ、紅軍大接戦の中に勝つ。

尚此の後個人試合を行う。本年は優勝者には副舎長カップを授与する事となる。第一回の獲得者は果して誰ぞ? < 勝ち上がり一覧表あり。電子テキスト化略 >

本年の試合に於ては非常なる番狂わせあり。紅白試合に於ても案外新人の活躍せしは驚異に値す。試合途中、汁粉の馳走あり。各々大いに馬力をかけて食す。其の余力を駆って大いに奮闘せるものあり。

試合終了十一時。副舎長の挨拶あり。個人優勝者渡辺君にカップ及び賞品の授与。又夫々三等迄賞品授与さる。紅白試合に於ける勝ちたる側はキャラメル一個宛なり。

二月三日(日)

平戸、川原君、三段へ。畑、野村君、砥石へ各々登山。

本日は久邇宮殿下御 禮行わる。節分なり。豆まきを行う。

二月四日(月)

手稲登山(運動部主催)参加希望者募集あり。

亦対秋田北盟寮との試合の選手発表あり。 < 5日記事空白 >

二月六日(水)

本日は大学記念日なるを以て休みなり。

記念式は中央講堂に於て午前十時より始めらる。例年の如く紅白の餅を参列者に供せらる。

二月七、八、九日

近来天候甚だ宜しきも雪の降らざる事はスキーファンをして失望せしむ。

予科、志願者三千八百人に及ぶ。

二月十日(日)

平戸君奥手稲へ、野村君砥石山へ。

午後一時より秋田北盟寮に於てピンポン試合をなす。戦況は左の如し。

| | |
|----|----|
| 青寄 | 秋田 |
| 土井 | 杉山 |
| 川原 | |
| 大塚 | 首藤 |
| 坪田 | |
| 平川 | 原田 |
| | 酒田 |
| 広瀬 | 管野 |
| 畑 | 辻 |
| 三島 | 須田 |
| 笹部 | 斉藤 |
| 渡辺 | 吉田 |
| 平川 | |
| 渡辺 | 小室 |

不戦一人、優退三人を残せしめて敗れる。

今年の試合に於て我と彼大なる差あるに非らざる如し。然も其の敗因たるや土井、大塚君の振わざると且つ畑君の惜しくも をして名をなさしめたるにあり。

亦渡辺君平素の調子全く出ず、あえなくなりたる等、此の日我に頗る不利なコンディションにあり。

も、優 三位出したるは多とす可きなり。

二月十一日(月)

紀元節なり。例年の吉例に倣いて寄宿舍の登山を行う。参加者次の如し。

平戸、平川、畑、大塚、川原、広瀬、三島、村津、坪田、寺岡君なり。先発隊、平川、大塚、坪田、寺岡君、七時四十分にて出発す。他は八時四十九分札幌を発す。

軽川スロープにて先発隊と合し、アザラシを付けて登る。

時々降雪あり。雁皮平下の沢口で昼飯とす。其れより降りしきる雪中をネオ・パラダイスに向う。着する為、十一時此処にて腹の支度をなしてスロープにて享樂す。二時過ぎ帰途に付く。オカマ、ボーゲンにて下るものあり。沢に着いて羊羹を食して鋭気を養う。坪田君、無言にて食す。へばりて声出でざるに依るか? 帰途享樂しつつ、四時十分、軽川着、四時二十分の汽車にて無事元気旺盛にて帰る。帰着後坪田君の意気大いに揚る。

二月十二日(火)

卒業送別会委員左の如く発表ありたり。笹部、大塚、坪田、村津、三島君

二月十三(水)、十四(木)日 天候甚だ良し。相当の寒さなり。

二月十五日(金) 雪降る。二三寸なれども雪質良し。

二月十六日(土) <卒業生送別会の月次会>

今日午後五時より卒業生送別会開催。本年の卒業生左の如し。平戸勝七君、平野三夫君、野村虎男君。

来賓一先生宮部舎長、今井、中島、奥田、時田、多勢の諸氏。

笹部君の開会の辞、平川副舎長の挨拶あり。

舎生笹部、土井、畑、大塚、本間、広瀬、寺岡、坪田、川原君卒業を送るの言葉あり。各人各様に入舎当時の思い出、スキー、ファースト・インプレッションを述べて卒業を祝う。ついで先輩奥田氏先ず立って卒業生を送るの辞を述べらる。ついで時田、多勢、今井各氏、所感を述べ卒業生の前途を祝し、送別の言葉を述べらる。

宮部先生立ちて種々御訓話あり、又故岩崎行、広井勇両氏の略歴について説明せられ其の小冊子と岩崎氏著書一冊とを御寄贈せられたり。閉会十一時半。

二月十七日

学年来週寄り一年の総決算の事は間近に迫った。各自皆折角の好天 雪にも出掛けるもの少なし。< 18、19日記事空白 >

廿日 平川君今日或る筈なりし試験、来週に延期。< 21、22日記事空白 >

二月廿三日 予科試験日割発表。試験期日三月四日より九日迄なり。

二月廿四日

今日最後の日曜 試験前に十分にスキーを享樂せんとせし者、今日の暗雲に天の無情をうらむ。

二月廿六日

本日決算を行う。一人一日五十四銭強。総計二十五円六十銭。概して廉価に上れり。

二月廿八日

試験近く皆緊張す。笹部君盲腸の気味にて病臥せる。試験を目前に控えて氏の為にも甚だ憐れむ可し。切に回復を祈る次第なり。

3月1、2、3日 連日緊張裏に皆今学年とう尾の奮闘を試る。

3月4日

本日より予科試験始る。近日来春に似合わぬ粉雪降りてスキー心を誘われるこそ如何に甚しきことよ。而して学年試験苦のいかに辛きことよ。一年諸君、二年諸君しのぎを削って奮闘する。よき結果の生れかし。

三月六日 朝来吹雪く。三月には珍しき現象なり。三号の煙筒折れる。

三月七、八日

雪降る。須にて休む。雪水気を帯ぶ。

電車通りには土露わる。雪ザラメとなりて已に春近きを知る。

予科一年試験終了。一週間に近き奮闘より解放され、嬉々然とした貌、思う可し。

三月九日

麗らかなる天気なり予科本日を以て全部試験終了。スキーに、活動に、皆享樂に出掛ける。

三月十日

予科ボーイ試験終了後の一日を充分に享樂せんと各々スキーを為しに出発す。

本日陸軍記念日なるを以て大通りに於て第十三連隊の演習あり。

今晚九時四十分の急行にて坪田、川原の両君帰省す。先ずその先人を為すわけなり。

< 11日空白 >

三月十二日

朝七時の汽車で畑賢二君帰省さる。

大塚憲郷君なるものあり。徒然なるままに本科生の試験に苦しめるのを省みず手稲山スキ

一登山をなす。午前中は快晴なりにしも昼頃より突然暴風雪襲来し、這々の体にて逃げ帰る。夜ね広瀬角治君帰阪さる。

三月十三日

朝 渡辺弘君帰省さる（群馬県）。

「山からの便り」顔がドス黒くなった、頭髪がポーポーになった、シャツがネチャネチャになった。広瀬、村津、三島（十日朝 - 十二日昼までパラダイス）。後藤源太郎君（十日朝 - 十三日夕、ヘルベチュア）。

三月十四日

朝 本間憲一君（新潟県）寺岡義郎君（静岡県）帰省さる。

< 15 - 17 日記事空白 >

三月十八日

半数の舎生が帰省したので寂寥の感あり。而も試験未終了者も二三あるため舎内極めて静淑[ママ]。

平戸、平川の両君、宮部先生より晚餐の御招きを受く。副舎長としての労を犒らわるるためなり。先生の終始一貫寄宿舍を愛さるるの情、誠に感謝に堪えず。

三月十九日

終日春雨、煙る。本年初めての雨なり。やがては雪も融去りて美しき春は訪れなん。吾等が心も希望に萌ゆ。

三月廿日

今日は又昨日と打って変わった大吹雪。折角骨折りし掃除した石炭小屋も再び雪に埋もる。帰省せる舎生諸君より通信あり。本間、渡辺、寺岡、広瀬...。「余り黒いものですからこちらでは黒ん坊で通って居ります。然し雪の国にはもっと黒い顔が沢山並んでいるとすましたものです」

朝大憲郷君帰省さる（千葉県）。

三月廿一日

彼岸の中日なり。電車の屋上に靡く旗も春らしさを増し来る。

夕食にはトンカツの馳走あり、異にして意なるもの也。

笹部三郎君、盲腸手術のため大学病院榊外科に入院さる。折角の春休みも無となり気の毒なり。午後土井恒喜、平川好文の両君大学病院に関谷君を見舞う。君は予科一年級当時は舎生たり。其後は恵迪寮に在りき。然るに如何なる籤勢にか将来有為の才を抱きて重篤の床に臥す。同情に堪えず。 < 22 日空白 >

三月廿三日

平戸勝七君目出度く農学士と成られ、就職に関しては破格の厚遇を得。万歳万歳の余勢をかりて奥手稲征服に向う（廿五日夜帰舎）

三月廿四日

本日も再び春雨の音を聴く。何となくよきものなり。

午後、村津俊太郎、平川好文の両君、病院に笹部君を見舞う。昨日は多少苦しむたるが本日は甚だ快しと云う。鼠の小便程の茶を啜り大いに喜ぶ。一日も速かなる全快を祈る。

三月廿五日

東京よりの招電あり。朝七時の列車にて三島洋平君（朝鮮）出発さる。

今日はまた雪降る。世の中は有為転変極りなしか。それにしても余りに無情也。

三月廿六日

本日は終日快晴。空には一点の雲なく、春の日差はゆらゆらと路傍の雪も消えて行く。にも係わらず土井恒喜君は朝から製図室に閉籠る。今夜は徹夜だとか。

三月廿七日

朝五時土井君帰舎す。昼頃平戸勝七君空沼ヒュッテに向う。

午後、野村虎男君旅行さる。氏は此の度農学実科を卒業せられ道庁裏のバター検査所員と成らる。背広も出来ました。七十数円。

三月廿八日

夜行にて土井恒喜君帰函す。車中手荷物紛失し大失態を演ぜり。 < 29日空白 >

三月三十日

北大の卒業式挙行さる。学校より昼食の饗応あり。当舎より平戸、野村の両君出席す。

午後三時豊平駅発にて平川、村津の両君は先輩多勢氏と共に無意根スキー登山に向う。天候良好。

三月三十一日

寺岡義郎君帰舎さる。水産製造実習のため也。但し本年は鯧不漁らしく未だに鯧売りの声も聞かず。故に流石の水産健児も手持無沙汰なるべし。

四月一日

朝より雨降る。泥濘甚だし。気温も案外に降りて閉口す。

後藤源太郎君、都合にて退舎さる。予科1年級より在舎し、仲々の勉強家なるに惜し。

午後雨を突きつつスキー家連帰る。村津君は側に依りて根も精も尽き果たし大いにへバルとか。嗚呼。

四月二日

やっと春めき来れるに本日は又もや大風雪あり。全舎生の意気消沈す。何となれば道路は愈々泥海と化し、スキーの快は味えずそこへ持ってきてストーブはまたまた掃除を始めねばならぬとは厄介な。

四月三日

神武天皇祭なり。雪上にススだらけの国旗を突立てて建国の昔をしのぶ。

笹部三郎君目出度く全快せられ久降りにて帰舎す。

非常な元気なるは幸いなりと一同喜ぶ。サア二週間分大いに食うぞ。

四月四日

昨今は舎生の数も少き故か皆んな揃って夜の札幌を散歩する事多し。何処をどう不良ツク事やら。

笹部君の全快祝いあり。

野村君遂に高等御下宿、北盟館に移るため退舎せらる。(但し三月廿七日以後は欠食)

四月五日

夜、平戸勝七君(横浜)帰省退舎せらる。将来共札幌に在りて活躍せらるるらしく、居をやまと館に定めらる。その引越しには書籍多く、全て重きもののみにて村津、寺岡君らの手伝人僻易す。

四月六日

夜、笹部三郎君（東京）帰省さる。病後の旅の故、大事をとりて二等寝台にて往く。在舎生最小限の三名となる。其中寺岡君は鯨の実習のため連日忙し。大分魚屋くさくなる。村津君はヨク勉強す。感心也。＜7日空白＞

四月八日

畳替えをなす。全体で十五枚程なるが、不注意のために損ぜるもの多きを認む。寄宿舍を愛する精神はかゝる方面にも及したきものなり。

夜、本間憲一君帰舎せらる。新潟名物、大梨を沢山土産として。

四月九日

終日曇天。時々降雪を見る。新入舎生のためなど憶いて窓際に山なす雪を除く。

夜、大塚憲郷君帰舎。帰省中病床に在りしとか。気毒なり。何のための休みかわから痔。

四月十日 畑君帰舎（朝）

四月十二日

早朝、寄宿舍一の小母サン子、坪田君が帰舎。札幌の悪道路に故郷が恋しくなりはしなかつたか？

帰舎したものの七名。淋しい様な気がする。夜おそく三島、土井両君、元気な顔を見せる。

四月十三日

降雪。珍しい気候。夜舎に残るもの僅か四名。土曜日とて活動へ行くもの多し。畑、寺岡、村津、坪田君が駄弁っている所へ渡辺、広瀬両君ひょっこりと帰る。

ポツポツ街に新白線を見る。

四月十四日 部屋替えを行う。

| | |
|----------|--------|
| 一号 笹部君 | 七 坪田君 |
| 二 渡辺、寺岡君 | 八 畑 々 |
| 三 三島 々 | 九 村津 々 |
| 四 川原 々 | 十 広瀬 々 |
| 五 土井 々 | 十一大塚 々 |
| 六 本間 々 | |

今学期の委員

食事部 土井君 衛生 寺岡々 会計 広瀬々 文藝 坪田々 運動 村津々
村津、三島、広瀬、寺岡、坪田の二年連七号に集い未来のフラウについての意見、希望を述べる。その詳細は内密。

四月十五日

昨日の雪のため今日はぬかるみ一層はなはだしくなる。

大岩臯一君（予農）入舎 七号室。（欠食）

八号室にて転室慰労宴？を張る。茶菓。寺岡君今日から三日間実習見学に出向く。今日は高島へ。鯨を手づから捕らえたそう。

四月十六日

樋口勝義君（予医）入舎、九号。宮入泉君（水専）入舎、十号（欠食）。新進を多く迎えることは何となくうれしい心持ちなる。村津君近頃盛んに吐息をつく。例の薄別温泉のロマン？の思い出してはか。寺岡君、忍路行きで外泊。

四月十七日

新入舎生。木村道儀君(土木)、平岩幸作(土木)、石平左衛門君(予農)、桜林繁君(予農)〔ママ〕。

毎日引続いて新入舎生が来るので副舎長、平川君はフラフラになって居られるは、いくら舎の仕事とはいえ気の毒だ。先輩面をした(暴言多謝)二年以上の我々は彼等を三三伍々と引率?して街の見物。新白線至る所に出没している。いよいよ学生のぼっこする時機とはなる。久しぶりに朝から恋人(太陽)が顔を見せ一日にして道路乾きはじめた。これから当分の間風・砂埃にいじめられることだろう。明日は歓迎コンパ。委員、寺岡、坪田両君。

四月十八日 <クラーク二世来校>

一年生の初登校日、校庭に新丸を、過去のその日を思い出してなつかしく見る。本校創立の恩人故WSクラーク先生の第二子、ハーバード大学博物館長クラーク二世が本校を訪ねられ我々に一場の訓話をなされた。今年の新入生は恵まれている。新入早々この機会に恵まれたことは。クラーク氏は中央講堂で高杉教授通訳のもとにWSクラーク先生のいわれた野心と、シェークスピアの野心の区別、一個の動物学者としての氏の宗教に対する考えを述べられた。自然科学者としての氏は神の存在を信じておられる。松村松年博士は同じく動物学者でも神の存在を否定する。面白い対称だ。夜、新入生歓迎コンパ。寮歌、民謡とびだす。二年全部のストームが大かっさい、九時散会。

四月十九日

平川君、連日の新入生の対応につかれ三日間の予定で薄別温泉へ保養に。残念がる舎生あり。夜、平戸君来舎。横浜名物「亀楽せんべい」にありつく。三島君明日退舎されるので二年生全員 に送別の宴をはる。安田一次君(予工)入舎。

四月二十日

三島君1年間の住居を引き払って、円山へ遁世?す。以後の活動注目に値するものあらん。土曜とて外出する者多し。川原君早朝寒風について元気よく帰舎。

四月二十一日

春雨がしとしと降る。名は美しいが街路を目茶目茶によごす。馬糞の道と化す。罪なビューティーだわい。夜しるこ製造。

四月二十二日 <うすぎたないマントの娘さん> <だてにデンブン履きはせぬ>

気まぐれな天候だわい。いま頃になってまだ雪花をちらしている。都ならばアーム・イン・アームで桜の堤を舗道の上を歩むカップルの姿を見る頃だったのに札幌ではうすぎたない-これは失礼-とにかくそんな感じのするマントに身をくるんだ娘さん達を見せている。彼女達も伊達にデンブンはきはせぬ。道がぬかるみなればこそ、つらい思いをしてベチャリポチャリ。これを悪く云う男性の気が知れぬ。

四月分の舎費決算をなす。一日食費五十銭。そのハイ・タイムに窓越しに猛烈な火事が起こった。自動車ポンプの歩みの如く現場へ。この季節に焼け出されては気の毒だ。火の用心。火の用心、カチカチ。

二十三日 亀井先輩昨夜の火事の見舞いに来らる。

四月二十五日

運動部が薄別温泉旅行を発表した。三年生諸兄パーティーに加われないのが残念だ。北二条東三丁目の風呂屋のボイラー爆発。死傷者を出す。

四月二十六日

新入生歓迎月次会。宮部舎長の御都合により来月に延期。委員、土井、畑、広瀬、本間君

四月二十七日

追々に日照りも続くようになったのでテニスコートの手入れをなす。コート開き。夜は明日の旅行の準備の為、運動部の村津君その他手伝って購入品の整理に取りかかる。十一時やっとできあがり goog night。愉快的な夢を見つつ？

四月二十八日 <薄別温泉旅行>

土井君を始め二年、一年全部旅装を整えて午前八時半舎を出る。山端で電車を捨ててテクシーで豊平の清流を側に藻岩を右へに見つつ足を運ぶ。土井君、工科マンの本領を発揮して難しいことばかり只す。

フレッシュマン皆元気よく足にマメを出したのもあったが旅行に支障を来さず。安田君の駄洒落「マメが出来たがマメツしちゃった」。四点。

簾舞の公認花岡神社で昼食。ピッチを早め療養館着。早速風呂へ。夜の帳の降りる中風呂場で新入諸君にストームのマーチ。水風呂の中で「コチャエコチャエ」。勇敢勇敢。

すきやきが夕飯。掛け布団一枚でふるえながらねむりにつく。

四月二十九日

寒い寒いとふるえながら目を覚ます。朝風呂にのびて十時出発、定山溪元の湯ホテルへ入り込む。我々を甘く見てか粗末な部屋へぶちこまれる。プールに二時間余りを費す。ふんだんに金をとられ礼もろくに云われず汽車中の人となりトランプ遊で大騒ぎ、他の相客達の迷惑？もそっこのけ。意気揚々と午後五時帰舎。残留部隊をうらやましがらせる。大島正幸君（予工）新入舎。

四月三十日 さすが猛者連もつかれが出たか朝寝する者が多い。

五月二日

しとすと雨が落ちるいんうつな日だ。何かしら頭から重たい者がおしつけている様な気がする。気が滅入る。

桜星会新入生歓迎会が武道場で行わる。

四時頃一人の婦人が魔の踏切で自殺をしかけたそうだ。そろそろ魔にさそわれる時節となってきた。

いつまでたっても木の新芽がふき出ぬ。花の八の字も聞かれぬ。もう内地では着物も薄くなって来たというに。

英国皇子グロスター侯殿下横浜着。ガーター勲章を日本皇帝に捧呈の為め。イヨイヨ日英両国間の親密の密ならん事を祈る次第である。

五月三日

大岩君胃けいれんで病臥せられる。気の毒に堪えぬ。明日は歓迎月次会の為め委員連外出す。

五月四日 <新入舎生歓迎・月次会>

佐藤総長にウエスレー大学法学博士の学位贈呈の為めメソジスト教会東洋監督ジェームス・ベーカー博士来札（三日）。本日中央講堂で伝達式、並びに講演アリ。

月次会委員腕によりを掛けて御馳走製造にいそがしい。

6時から宮部先生、鈴木、亀井両先輩列席の上、新入舎生歓迎会を開く。腕によりを掛けて色々の書物を参考にしてこしらえた物だけに料理人そっちのけの美味。七時から平戸、今井両兄を加えて歓談す。

舎長、副舎長の訓話、挨拶があり、新入舎生の自己紹介、旧舎生の色々の希望、要求をのべ茶菓にありつき、へボヌキをやって散会。朝から柄にもなく、雪がちらつき北海道らしい夕。雅趣ある夕べのこの集り、一夜を愉快地暮した。雪はまだちらついている。

五月五日

屋根が白くなっていた。亀井先輩からの寄贈によるカシワ餅にパクツク。時は七時。節句の一夜を楽しむ。D君昨夜の月次会の残り皿の権太を見つげられてすっぱ抜かれた。権太道ますます盛ん。

五月六日 笹部君帰舎。元気な顔。何より何より。夕方帰舎披露の御馳走ありたり。

五月七日

落葉松の芽もやっと目に付く様になった。やっと春となったかなという様な淡い感に打たれる。気の早い奴は花の八の字も開かぬ此の頃丸山へ出掛ける。彼等サラリーマン達は花を愛でるのではなく他に目的のある奴だから救われぬ。十時頃突然舎の静けさを破って聞ゆ。D君の声「オーイ権太のテストをするぞ」何事かと思れば一年生の猛者H君、夕食のチキンライスを皿ごと失敬して室に隠匿。D君先日あばかれた腹いせにしたらしいとはもっばらの評判。

八日<空白>

五月九日 太陽が輝く。

十日 昼から雨となり再び泥海の道と化した。花の開く時機が一日延びる勘定になる。

五月十一日

図書控え簿をカード式にする為め舎生諸君の手を借りて夜中十二時まで続けたが完成しえず。

五月十二日 <寄宿舍のラジオあらし完成>

今日の日曜は日本晴れの好天気。早くから植物園へ出掛けるもの多し。植物園には多くの老若男女の春を享楽するものを見受ける。カード製作を続ける。東西対抗の野球戦を行う。十八対十三で西側の優勝。

寄宿舍のラジオ製作を頼まれていた畑、坪田君、新入生の安田君に権利？[ママ]をゆずり今晚あらし完成す。

五月十三日 <ラジオのアンテナを張る>

昼過よりコート of 修繕を行う。金網を張り替え、ぼろコートも一新された。又、ラジオのアンテナを張るに畑君の手をわずらわし七号室の前の大木に登って頂く。

夜は七時から汁粉の御馳走あり。安田、土井君の大食には恐れ入った。

五月十四日 <近頃野球熱> <フルータフル・ウーマン>

殺風景に棒立ちになっている枝間を縫ってうすら寒い春らしい感のする風が吹いてくる。街行く人々の着物の一枚一枚と取られて行く。一本の五分咲きの桜の樹を認めた。可

憐な紅唇。春だ春だと謳歌したくなる。

近頃野球熱台頭して夕食後にはバットとボールの音がテニスコートから伝わってくる。近い中に巖鷲寮と野球の試合をする筈になっている。

舎付近にはフルータフル・ウーマンが多いのかゴチャゴチャと子供が集い、いくら叱っても恐い顔の小父さんがにらんでも感覚の鈍な奴らには一向ひびきがない。こんな有様を見たらサンガー婦人はどんな顔をするだろう。新マルサス主義を呪うだろう。後者はこう云う、「道徳的抑制は不可能だから仕様がないうさ」と。

五月十五日

今一人臨教の某君が近日入舎と定まった。今年位舎生の多い事は稀、否初めての事かも知れぬ。多ければ多い程経費も少なくなってよからう。が舎生諸君の自覚をうながしたい。どうしても大きなグループになる程一致団結は難しくなる。この舎は下宿とは違っている。故に全舎生の共同動作を特にお願ひしたい。個人的対立はその団体の崩壊を暗示する。

< 16日、項なし >

五月十七日 < 坊ちゃんも寄宿生活の辛苦――畳干し >

カラリと晴れ渡った大空。昨日迄とは豹変した天気である。この好天気にも恵まれた今日、早く起きる者が素敵に多い。成る程よく考へて見れば大掃除にとりかかって居るのだな。この天気を逃してなるものが、「鉄は熱いうちに打て」とばかりに日向に畳をかつぎだす。家族にあっては肩に塵をものせぬ坊ちゃんも寄宿生活の辛苦をしみじみと味わっているらしい。この天気が続くと好いなー。

実際今日は日向では熱い位だった。

五月十八日 < コーヒー・菓子で観桜会 >

吉例の観桜会を今年は午後七時舎を出発、円山にて行かう。

マントにくるまって大籠にリンゴ、菓罐、コーヒーを入れてのこのこと夜の道を寮歌、ストーム歌に景気をつけて。菓罐をひっ掲げて神社に参拝す。とても風流人の神詣で。参道は淡い灯籠の灯にほんのりと明るくていかにも神社の境内らしい感を与えるが一步道を外すと落花狼藉「酒なくて何が己の桜かな」の連中が三味や太鼓に合わせてドンチャンさわぎ。桜見に来た我が聖人・君子？[ママ]諸君はその中に足を停むことを好まぬと焚き火をかこんでささやかな宴を張る。コーヒー・菓子を飲み食いしていよいよ人気なき所に集まってヘボヌキをやって九時散会。

五月十九日 < 岩手・巖鷲寮と野球の試合 戦跡 >

昨晚のポツリポツリの天涙も今朝は引込み風は寒いが絶好の野球日和。土井御大竹刀をもって各室を起こし回る。8時開戦。今日は又寮祭である。寮生必死になって飾りつけをやっている。戦跡は別紙の如し。

戦跡 [貼り付けられた別紙]

第一回・平川遊ゴロ失に生き2Bを盗む。村津二遊間安打 笹部Pゴロに村津フォースアウト 土井Pゴロ。

・彦坂三振 栃内(万)内野安打2Bを盗ム。菊池四球 武藤内野安打 下斗米、鹿討
第二回・石 右安打 宮入三振 桜林内野安打 大島三振 坪田Pゴロ。

・野坂三振 佐々木Pゴロ 船越三振

第三回・平川三振 村津二盗二サシ。笹部三葡二生ク 土井三振

・彦坂 Pゴロ 栃内 Pゴロ 菊池 Pゴロ

第四回・石 Pゴロ 宮入四球二盗ニササル 桜林 Pゴロ

・武藤三振 下斗米 Pゴロ 鹿討三振

第五回・大島四球 坪田、中安打 平川 Pゴロ 村津右安打、一死満塁 笹部三振 土井 SSゴロ

・野坂、佐々木三振 船越二飛

第六回・石三振 宮入遊飛失二生ク 桜林打者二立ツ時宮入連盗ニ成功。捕手[牽]制球三塁ニ高投シ宮入ホームイン 大島、坪田三振。

・彦坂二直 栃内一二間安打、二盗ニササル。菊池四球二盗にササル。

第七回

巖鷲寮最後の頑張りで武藤右翼ヒットに出て二、三塁ニヨル。

宮入投手頑張つて遂に無得点で終る。

一対〇で寄宿舎側辛勝。

巖鷲寮チーム

2彦坂 9栃内(万) 1菊池 3武藤 6下斗米 5鹿討 7野坂 8佐々木 4船越
青寄チーム

5平川 8村津 2笹部 6土井 3石 1宮入 7桜林 4大島 9坪田

五月二十一日

日々太陽の温いねむけを与える様な光を浴びる頃となった。今日は平川君の第廿四目の誕生日とて午後六時から特別室で御馳走があった。尚、広瀬君は明日から陸上競技部の合宿があるので誕生日を一週間繰上げて平川君と一緒に。陸上競技選手七名 全国学生大会の為め出発。食事部委員を一名増員の為め、選挙を行う。

当選 笹部君(八票) 次点 畑君(四票)

五月二十二日

新生の勢いを示す若葉が日一日と大きく目立ってくる。梅も咲き始めた。桜より梅がおそいなんで変だなあ。

早慶戦について俺は早大、俺は慶大ととんだ所で意地を張る。遂に慶応、二勝一敗で早大を破る。第一回、三対二、早勝。第二回、五A対四、慶勝。決勝、十対七、慶勝。

村津君、セロに熱中して猛練をやっている。

舎の前の一本の桜満開。山の神が二人其の下でお花見をやっていた。円山の雑踏の巷へ行くよりは余程風流人だ。

金森久和君(臨教一)新入舎。

五月決算を行う。一日の食費五拾一銭とは食事部大出来。広瀬、大岩両君合宿に。

五月二十三日

意地悪い風が盛んに砂埃を立てる。青葉を見ろという事はさすがにうれしい。

山室軍平氏の講演が二時半より中央講堂にて、マタイ伝十五章の放蕩息子の話を出して我々に多大の感動を与え成功裏にこの講演を終えた。氏の話し振りは流石に堂々たるものである。合宿に行きし二人故郷?なつかしの余り、のこのこ寮を出て遊びに来る。

舎付近の子供連盛んに砂を投げ合つてたわむれる。

二十四日 宮入君退舎。

五月二十五日

土曜日というので「メトロポリス」を三友館に見に行く者多し。

図書カードの分類をなす。

予科、札鉄の野球試合、予科軍最後の頑張りきかず十四対六で惨敗。対小樽戦に 自重を祈る。

五月二十六日 < 舎の図書を整理、分類し直し >

どんよりした天候に今日の一日を外に過さんとした連中は天をにらんで残念がる。昼食後図書の整理、分類をし三時半完了す。随分ひどい図書が多い。亦今迄の整理が不完全（今迄の委員の方々に対して失礼な言だが）であった為にかなり整理に手こずった。今日を以て不完全ながらも今迄よりはよくなったつもりでいる。

此の度の整理に午を課して下さった方々に感謝する次第である。

尚この度の分類整理を思い立ったのは笹部君のおかげである。

五月二十七日 < 予科・実科・専門部一年生は実弾演習 >

今日は海軍記念日。授業が休みになるかと思ったら当が外れた。予、実、専、各一年生は月寒へ実弾演習に行く。

郭公の初声を寢床の中に聞く。いつ聞いても心のすがすがしさを与えてくれる声調だ。

五月二十八日

とても好天気。今日は二年の実弾射撃。早く

本年最初の轢死あり。こわいもの見たさに飛びでる者多し。

原因は胃癌を苦にしてとのこと。どうせ死ぬ身と言えど哀れ。この最後 六月一日月次会の委員発表。樋口、平石、川原、村津君。

今日の暑さ、春を飛ばして初夏の来たかたち。

五月二十九日

北中対予科野球戦、七：二で勝つ。今日で実弾射撃終わる。三日間を通じ舎の高点者、四十点満点で安田君三十点、

五月三十日 < 寄宿舍の花壇に種をまく >

殺風景なこの寄宿舍を美化するために西側のさゝやかな花花壇に草花の種をまく。近頃夜、食後の散歩に農場のポプラ並木の方面に行くもの多し。喜ばしい傾向だ。

札師と予科の野球戦、二十に対二で大勝。

目に青葉。

広瀬、大岩両君合宿よりかえる。時に午後八時半。

五月三十一日 < 犬飼助教授の洋行土産話 >

いよいよ今日一日で今年の五月も永遠にさらば。

「牧笛」の原稿を1ヵ月前から募集したがちゃんと締め切りを示したのに出さぬ人があるが、少し考えて貰いたいものである。

六月一日 中央講堂で国際連盟協会より派遣された石井氏、山川、奥山両氏の講演あり。石井氏の話は体験談なる故興味が湧いたが二氏の話はてんで面白くなく舟漕ぐ者講堂に満つ。

六時から月次会を行ふ。例により委員手製の料理に舌鼓？をうつ。アイスクリームの饗応に大喜び。宮部舎長、亀井、犬飼、奥田、平戸各先輩と一緒に話に花を咲かす。犬飼助

教授の洋行土産話は我々に大きな暗示を与えられた。「黒人の靴磨きが私にチャイナマンと言ったので向かっ腹が立ったが、よく聞いてみるとシャイン、マン（靴を磨きなさい）と言うのであった」。意地の曲がった者にはいつも悪く意味がとれて、とんだ失敗をやらすものである。この意地がなほらねば外人に嫌はれ続けるであらう。日本に於ける支那人も同様の感情を有するならん。

六月二日

天候快晴、郊外に散歩、採集に行くもの多し。植物園は子供大人を問わずうようよしている。

三時より東北大・北大の定期第三回ア式蹴球戦、一勝一敗の後をうけて行。二対〇で北大敗れる。

村津君セロ猛練の為外泊す。テニスコートを手入れしたのでシルコに八時半ありついた。

六月三日

平岩君（土木一年）感ずるところありて、土木を退学し来年新たに予科を受ける事に決心され明日帰ることになったので午後九時から送別会を行う。同君の自愛を願う次第である。

六月四日

午前七時廿分の列車で平石君帰省さる。駅頭へ出掛けた一年連出来ることなら入場券でお母ちゃんのお乳の元へ飛んで行きたかったらう？テニスコートにローラーを引く。

六月五日

夕食後運動かたがたローラーを引く。D君古色蒼然たる五十銭銀貨を拾う。「神吾に五十銭賜ふ」。五十銭は菓子と変化する。

六日 昨日今日でアンテナをつけ終えた。馬鹿に今日は冷える。＜7日頃なし＞

六月八日 <スズランを小包で送る>

予科対札鉄一第二回野球戦。五対三で再敗。オイしかり頼むぜ。対小樽高商ラグビー戦、十一対〇で八戦八勝。ラグビーにひかえて野球の淋しさ。頑張れ。

九日 鈴ラン狩りに出掛ける者多し。島松、早来方面へ。

夕刻、大きなバスケット、カバンに沢山つめこんで片手には小包用の箱をかかえて、うれしそうにして帰舎す。さて何処へ送るのだから。各部屋は小包を作るに大童。

駅に駆けつければ沢山の人出一時間以上も待つ人がある。

スズランをしとねとすることの出来る我々は如何に内地人にうらやましがられることよ。

六月十日

今年のストライキ以来中絶せし文武会を新しき組織によって再生し、新入会員歓迎会を円山に催す。

相の好天気も時間の経るにつれて悪化し雨となる。

「すし、アイスクリーム、タンマ、、、」等、券にて行き届く様にしたのに尚不徳漢が居て、貰えなかった人が沢山あった。一時頃散開。

三時より舎内テニス大会を行う。

第一回戦

| | | | | | |
|---------|-----|---------|---------|-----|---------|
| 桜林君・金森君 | - - | 大塚君・大島君 | 渡辺君・広瀬君 | - - | 本間君・木村君 |
| 平川君・畑君 | - - | 大岩君・樋口君 | 土井君・石君 | - - | 笹部君・坪田君 |
| 安田君・寺岡君 | - - | 川原君・金森君 | | | |

第二回戦

安田君・寺岡君 - - 土井君・石君 大塚君・大島君 - - 渡辺君・広瀬君
不戦 平川・畑組
準決勝 土井君・石君 - - 平川君・畑君 大塚・大島組 不戦
優勝戦 土井・石組 - - 大塚・大島
副舎長カップは土井・石組へ。

六月十一日 今日は自由研究という名目で休みとなる。あいにく雨天。

十四日 札幌神社大祭第一日目。

六月十五日

清水恒久君（予農1）入舎。街は舎から出て来た人の波。舎生の多くも浮かれて？外出。

十六日 臥薪嘗胆、ここに四度目の春を迎えて小樽高商を破るべき晴の戦は到来した。

17日の新聞 <16日の小樽と予科の野球試合の記事 戦況描写の詳しい記事一舎の
日誌にも影響と思われる>

六月十七日

今日は休日。昨日駒ヶ岳爆発す。西側の窓際に植えた朝顔すくすくと成長して来たが近頃は
はいてももうすら寒い風邪に見舞われているので殺風景。

十八日 学期末試験は七月一日ヨリと発表された。<19 - 21日記載無し>

六月二十二日

しとしとと降り続く雨にはホトホト閉口する。全くメランコリーになってしまう。内地では
もう水泳するという便りを見たがこちらではそれどころのさわぎではない。朝夕は冷え
昼とても汗の出ると言う程の事も無い。来月一日から学期試験なので頑張ることノヽ。

十一時前に休む人は皆無だ。午後七時から文武会第十四回発表演奏会を行う。雨天の為聴
衆は少なかった。聴衆の大半はいつものことながらも女性とは。十時終了。

この頃また魔の踏切で一人の命が失われた。

二十三日 相変わらずしとしと。

二十四日 決算を行う。医科はもう休み。しゃくだナー。

六月二十五日

試験は遠慮することなく近づく。灯火がおそくまで窓外にもれる。アカシヤの花が目につ
く様になった。郭公が鳴きアカシヤの薫る好散歩時に何の因果か平生サボル結果か、室に
止まらねばならぬ。関谷君が昨夜死去された由。<26 - 28日、頂なし>

六月二十九日

土井君、帰省。朝。後に残された連中、試験を目前に控えて、お乳の恋しさに一杯になっ
たことだらう。風強く塵が立つ。試験の為、予科ボーイ、外出を控える。浮世の塵を外に
見て、、、[ママ]か。

六月三十日 ライオン内閣、オラガー内閣に変わる。

七月一日

いよいよ待ち焦がれて居た？一学期総決算の第一日が来た。皆朝早くから床を出て頑張っ
ている。コンデなんか貰わぬ様に願います。

コンデ、コンデと叫びながら続いて帰ってくる。コンデとってもとらぬと言ってかえればよいにナー。遠慮は御無用。今日から五日又は六日間苦しめられるのだがうんと頑張って、コンデなんかにぎることお断り。

七月三日 久し振りに喜雨あり。埃おさまる。月次会委員発表、大塚、桜林、坪田

七月四日 笹部君空沼へ向けて出発（朝食ノミ）

七月五日

予農工一年を除いて試験無事終了。明日も一日という連中、残念がること、、、。

渡辺弘君退舎、桑園の方へ。

七月六日

やっと全部が解放され自由になった。

畑君午前七時半帰省の途につく。見送りに行きし者、故郷の空をながめつゝか、大岩君、無性に帰りたくなり十一時頃急に荷物をまとめて汽車の人となる。（朝食のみ）。同じく樋口君も一緒に。

四時から竹の家で月次会を開く。チャン料理初めてのいいかもの食ひと考へ大いに閉口す。五時半閉会。支那料理の精か合間が長い。完全にのびちゃった。七時より談話の集まりをなす。先輩一人も見えず、先生も見えず、あっさりと片付く。茶菓の時になって宮部先生見える。

委員の改選の結果、食事部 畑君、大島君 会計 本間君

文藝 川原君 運動 大塚君 衛生 大岩君

七月七日 <ラジオらしきもの出来上がる>

石君、木村君帰省（共に欠食）

夜遅く大漁踊を踊を踊り残留部隊氣勢を上げる。

安田、坪田両君、午前二時までかかってラジオを再び作り直して箱に収め、ラジオらしきものができあがった。

七月八日

大島君（朝）、安田君、清水君（夜）帰省の途につく。うれしそうに窓から出した顔。だんだん残留部隊が減少して来る。今尚夕方は寒いと言いたい位。寺岡君、樺太へ向けて視察？旅行に夜出発。

七月九日 本間君早朝帰省。金森君、夜帰省。

七月十日 <樺太へ演奏旅行>

笹部君、川原君早朝帰省。広瀬君、昼食後帰省。

平川、桜林、坪田君樺太演奏旅行の為、午後7時二十分出発。大塚君一人最後に踏み止まる。鼠に引かれぬようご用心。<11--16日の記事空白>

七月十七日

昼頃、樺太演奏帰りの一隊（平川、坪田、桜林）帰舎す。途中大雪登山の予定も何処へやら一同ホームシックにかかる。舎には大塚君独りクスブリ居たり。

七月十八日

夜、坪田、桜林両君早速帰省す。札幌駅に前舎生なる三島、村津両君と合し賑やかに出発せり。

七月十九日

夜遅く寺岡君帰舎す。樺太の物価高きと享樂の地少なきとに驚きて逃げ帰る。神経衰弱にかかれりとか。

七月廿日 夜七時四九分の汽車にて寺岡君帰省さる。

七月廿一日

夜大塚君帰省さる。札幌も昨今甚だしく暑い。雨は降らず北五条の道路などは自動車の通過毎に埃にて充満され透視不能となる。<22,23日空白>

七月廿四日 平川君二日程旅行され廿六日朝札幌発、帰省さる。

<夏休みで7.25--8.23 舎生不在、日誌空白>

八月廿八日 本間君帰舎(午後五時)

八月廿九日 大塚、川原君帰舎(午後十時)

八月三十一日 大岩君朝帰舎。石君夜帰舎さる。

九月一日(日曜)

朝、畑君帰舎、元気なり。本来なれば二学期始業式の為、少なくとも本日返は帰舎する筈であるが日曜の為か帰る者なし。

午前多勢君来舎、晩、樋口君帰舎、色甚だ悪し。

九月二日

朝、安田君帰舎。甚だ真面目なり。平川君元氣にて帰舎さる。色黒くなりて甚だ健康そうなり。<3日事項無し>

九月四日

晩、桜林君帰舎。大島君は室蘭に回り明日帰舎の筈と。坪田、広瀬君は荷物丈早く帰舎するも、肝心の人なかなか帰らず。

九月五日 大島君帰舎す。吉川萬雄君(予独1)入舎さる

六日 広瀬、坪田君晩やと帰舎す。朝土井君帰舎す。

七日(土) 寺岡君帰舎す。帰る者/、皆元気なり。

八日(日) 今学期最初の日曜。テニス、山登りに皆各々一日を享樂す。

九月九日(月)

金森君、朝帰舎。今日よりは皆真面目に登校する様なり。

木村君晩帰舎さる。之で大体帰舎し残る者は清水君一人なり。今晚は帰る為、急に噂せしが遂に帰らず、随分呑気なる男たり。

九月十日

時々雨、北海の九月は已に / 読めぬ / あり。

甚だ涼しくして、正に運動のシーズンなり。暇のある中に大いに遊んで体力を養うべし。

九月十一日

近日来の連雨に依りて東京付近は甚だしき出水を見たる様なり。殊に下町付近に於て甚しく深川にては舟にて通行する写真見えたり。

十二日 所々に鉄道の不通の報あり。札幌は平穩にしてよき日続く。

九月十三日

清水恒久君帰舎す。可成り長き休暇なり。曰く「先日来の豪雨にて鉄道不通の恐れあれば遂に出発を延期せりなり」と。先ず之にて舎生一同揃ひたり。

九月十六日（月）晴、68度。

朝間の天気は甚だよい昨夜の雨は埃と塵をうるおし秋気澄む。天地共にうるはしく輝く。予科道場に於て甲山博道氏の居合いがあり、其の入神の技驚くに絶えたり。

明日のお月見の宴は豊平河辺に於いて為すべき旨の掲示あり。

御馳走沢山ある筈なりと其の道の強者、大いに腕によりを掛け明晩を期すべし。

九月十七日（火） <豊平川に赴き月見>

午後六時半より観月の為、豊平川に赴く。一行十九人。

幌平橋上流の中島の島に於て月を眺む。月は天に懸かり、こうこうたり。

時々雲在れども却って風情あり。静寂なる河岸。キラキラと月光に反影する豊水、藻岩は眼前に手稻、恵庭等は日本画に於ける淡き墨絵の如し。皆悠久な天地の姿を??いで歎息す。林檎、とうきび、枝豆、菓子等の御馳走あり。皆ハモニカと称してトウキビを食す。ストーム。平川君の所謂宝探しあり。安田君、坪田君幸運にも宝を得。殊に安田君は三分の二を??し、宝は筆記用インクなり。

九時過ぎ帰途に就く。或いは車にて、或いは徒歩にて。 <18日なし>

九月十九日

久しぶりの慈雨降る。??として降るの感深し。黄紅の如き街路もうるおされ、すがすがしき風あり。

見る。樹々を、空を、如何に?に秋はいきづくかを。

九月廿日

運動部主宰の支笏湖旅行の掲示あり「千歳迄（苗穂より）往復（苗穂より）湖畔迄、往路は歩行、一泊、翌日は全部汽車の便を?る予定」。費用概算三円也。 <21日なし>

九月廿二日、 <舎の支笏湖旅行>

午前五時半起床。全舎生皆よく起きる。朝食六時荷ごしらえ備わり、六時五十分出発。舎生十七名（土井君、金森君不参加）元気潑刺たり。

八時苗穂を出発する筈なりしも十分過ぎて発車せり。大陸的なる汽車哉と皆感歎す。

舎生車中に於て魚釣の道具作成に掛かって天狗の面に。腕に自信あるものの如し。但し皆口前のみの事か?

十時近くして千歳着。これより徒歩にて孵化場迄進む。

十一時半孵化場にて昼食、見学をす。千歳川の清冽に釣糸を垂る。ウグイ、ヤマベの如きは姿見せず皆かじかと称するものを釣る。

生命を保証せずという玩具同然の汽車にて先発するもの畑、大塚、寺岡、大島四君なり。他は皆徒歩にて進む。途中六里、オヤジの見舞をも受けず無事湖畔着は已に午後五時半。徒歩は大岩君、樋口君、吉川君最も速し。

夜、札幌より持参の牛にて腹をふくらます。

食後、将棋、碁、トランプ、闘球盤等々にて熱中す。

又一隊は月明の湖畔を逍遙し、高唱す。月夜の湖は美しけり。

十時半皆就寝。

九月廿三日

七時朝食。食後三隻の小舟に分乗し湖上をさまよふ。

快 快 一隊の釣り人はカジカ釣に夢中となる。樋口君鱒を釣りて正に獲んとして遂に放

す。皆落胆すること限りなし。

十一時半昼食。一時半愉快的な気分でマッチ箱につめ込まれ名残を惜しみつつ出発す。孵化場着二時半。休憩。釣をす。大いなるかじかの大漁なり。

坪田君コンディション悪しく馬車にて先発す。

四時頃より に出発す。六時頃皆千歳着。駅前にて空腹をそばにて満す。只一杯なるは皆残念そうなり。

九時半帰舎。而して一人の落伍なし。愉快的な支笏旅行はかくして愉快に終了せり。夕食を皆大いに食す。

九月廿四日

部屋替え組み合わせ発表あり。尚今週の予定発表さる。28日(土)月次会ある筈発表あり。委員左の如し。石、木村、大岩、大島君。

部屋のコンビネーション左に。

土屋・本間 川原・大塚 畑・安田君 大岩・桜林君 坪田・木村
広瀬君・吉川君 寺岡・大島君 清水・樋口 石・金森君

九月廿七日

舎内テニス大会、コンビネーション抽選の結果左の如し。

1 - 広瀬・石 2 - 大岩・木村 3 - 安田・本間 4 - 平川・樋口 5 - 土井・畑 6 -
桜林・吉川 7 - 坪田・大島 8 - 大塚・寺岡 9 - 川原・清水

九月廿八日 <月次会>

金森君、腹痛に病臥す。

午後七時より九月月次会あり。先生、及び先輩として時田、多勢両氏。時田氏、久し振りにて来会、樺太に旅行せし際に感じせし印象として、美の要素に付きて述べらる。即ち智的美と一般美とについてなり。

皆夏期休暇中に於ける体験、旅行等に付き話す。多勢氏は自己紹介をして止む。

平川副舎長はフレッシュとレフレッシュに付き語り、新入舎生吉川君を紹介す。ついで吉川君の自己紹介あり。

先生起って農学校時代に於ける旅行のお話をなされ、其中、定山溪温泉に遊びたる時の事をお話になり、旅行を学生時代に大いになす可しとすすめらる。

木村君の閉会の言葉ありて、茶菓の馳走あり。

へボヌキとストームに興を沸す。閉会、十一時半。

九月廿九日

本日秋期大掃除と部屋替を行う。

予科対高商の陸上対抗競技は44.5対12.5にて予科の大勝に帰す。

坪田、安田、清水君、札幌学生生徒射撃大会に出場す。安田君三十二点にて十四等に入賞。

金森君腸閉塞にて札幌市立病院に入院す。

田中前首相逝去の報あり。

九月三十日

皇后陛下内親王殿下を御分婉あらせらる。

実科、専門部、演習あり。

十月一日

テニス試合、組合せ発表。左の通り。

広瀬・石×大岩・木村 安田・本間×坪田・大島 平川・樋口×桜林・大島 寺岡・大塚×土井・畑 不戦勝組 川原・清水

十月二日 < 舎内テニス大会 >

本日は遷宮式なり。午前八時より中央講堂に於て祭式ある筈なり。

八時より試合開始す。結果左の如し

広瀬・石×大岩・木村 本間・安田×坪田・大島 平川・樋口×桜林・吉川
寺岡・大塚×土井・畑 不戦一勝、川原・清水 以上、第一回戦。

第二回戦

広瀬・石×坪田・大島 平川・樋口×川原・清水 土井・畑 不戦

第三回戦

広瀬・石×土井・畑 不戦 平川・樋口

優勝戦

平川・樋口×土井・畑

優勝組 平川・樋口組 二等 土井・畑組 三等 広瀬・石組

東西対抗戦 其の結果左の如し < 書き取り略 >

十月三日

前マカナイ及新マカナイ方の馳走として林檎、菓子あり。

寺岡君胃腸？悪しき気味にて臥す。

予科演習あり。

十月五日

予科対高商ラグビー戦は小樽花園グラウンドにて挙行さる。

十一対〇にて予科九戦九勝す。剣道は不戦四人を残して同じく勝つ。

十月六日

全北大対高商クラブ野球戦は大学球場にて行わる。十三A - 三にて北大敗退す。

予科対高商弓道戦は予科の勝利となる。

十月八日

予科の演習行わる。前日よりの曇天。時々雨を伴う。

畜産二部、研究室を焼く。今暁四時なり。市川博士研究室は全焼す。

第三十二回記念祭委員、左の如く発表ありたり。

食事 畑、寺岡、大島、安田、樋口、吉川

余興 川原、坪田、大岩、清水、石

装飾 土井、木村、桜林

接待 本間、広瀬

庶務 大塚

十日 天候悪し。毎日時雨す。庭前のつたの紅葉已に散る。

十月十二日

時雨る。やがて晴る。榆漸く黄紅し始む。已に冬色あり。早慶野球戦延期。ファン大いに失望す。

十月十三日

早慶第一回戦は三 - 〇にて早大の勝利に帰す。

十月十四日

表の通りは今朝よりの修繕にて騒がし。修理完成の暁は例年の如く泥濘に苦しむ事もなからん。

早慶二回戦、七 - 〇にて慶応勝つ。

十月十五日

天気よし。然ども一抹の悲しさを感じず。これ秋の去る故也や。

早慶決勝戦は六 - 三にて早大の優勝に帰す。各校ひいきのファン或は驚善戦は落胆す。

十月十六日

予科は桜星会に兼ねて春秋二期対高商戦に全勝したるを以て優勝祝賀会あり。

十月十七日

神嘗祭。折悪しき雨に折角の の時期を失して此の日在室するもの多し。

文芸部の楓林の原稿大部分集まる。廿日には発行にて終了予定なり。

運動部は十九日東西対抗野球を行うを掲示せり。

十月十八日 < 内閣の学生教化運動 >

現内閣の教化運動の一端は次の如く我等学生生徒にも一片の印刷となりて来たれり。

十月十九日

小橋文部大臣は近日中に来道の筈なり。大いに思想善導をなす筈なり。

東西対抗野球試合は七 - 六にて東軍惜敗す。

最初七点を獲られしもよく追撃して六点を得て最終回大島君ランナーにて三塁を盗みて成功も後離塁して刺殺され遂に万事休止、七回にて七 - 六の結果となる。

終了後、茶と菓子にて元気を回復して帰舎す。

十月廿日

記念祭準備に皆怠りなく努力す。ハーモニカは殆ど毎晩の猛練習なり。

十月廿一日 < バター検査場とピンポンの試合 >

廿三日バター検査場軍〔野村先輩の就職先〕とピンポンの試合をなす掲示あり。我軍のメンバー左の如し。

先鋒 平川君

広瀬君、畑君、安田君、桜林君、川原君

十月廿二日

楓林の原稿追々に集来す。今年は催促せずして大部分集まりたり。喜ばしき事なり。

十月廿三日

午後よりピンポンの試合をなす。結果別紙の如し。

我軍優勢なりしも敵将小野の猛逐に敗る。

十月廿五日

余興部の余興は田島淳氏作「夕立」なり。各部皆努力して練習す。上達甚し。

十月廿七日

流石に十月末となれば寒し。夜は殊に寒し。

十月二十八日 < 毎晩の余興練習 >

余興として大漁踊、佐渡おけさをなす事とせり。毎晩の胴間声にての練習には近所の人々大いに驚く所ならん。大体に於て各部の準備成る。

十月三十日 <余興部は衣装購入>

文芸部は「楓林」の装幀をなす。一日発行の予定なり。招待は大体に於て終了せし様子なり。余興部は衣裳を購入す。

十月三十一日 <記念祭余興プログラムは100枚印刷>

曇り勝ちなる空なり。今日予科、実、専部[ママ]の軍事教練査閲あり。記念祭余興プログラム百枚程印刷す。余興部は衣裳を得て大いに猛烈な練習をなす。ハーモニカ練習盛んに行わる。大岩君の侍の姿甚だ上出来なり。

十一月一日 <文武会デー 早慶戦ラジオ放送 内村教授の野球の話>

今朝の寒さ驚くにたえたり。手稻、奥手稻の連山皆雲に被わる。暗黒の雲、天を襲うの態なり。チラチラと風にまかせて雪降る。

本日は文部会デー初日にて殆ど皆授業なし。

午後中央講堂に於て松村教授の「民族発達の要求」なる講演あり。又後早慶戦・天覧試合の中継放送あり。後、内村教授の「野球の話」あり。

夜六時よりコーラス部の「ヴォルガの舟歌」「凱旋」あり。ついでマンドリン合奏「朝」其の他。オーケストラ部「トルコ行進曲」其の他あり。ついで映画有り。「暗黒街」「The Way of All Flesh」「映画時代」あり。

十一月二日

文武会運動会が行わる。寄宿舍参加者にして入賞せし者

百メートル 一着 川原君

自転車遅走 一着 安田君

走縄跳び 二着 広瀬君

十一月三日 <第23回創立記念祭>

明治節、晴れたり。午前記念祭準備に忙殺さる。大岩君発熱して臥床す。月次会、記念祭などよくたたる男なり。午後三時半より記念祭を挙行す。

宮部先生には都合悪しく御出席なし。先輩、鈴木(限)、亀井、今井、前川、時田、笹部〔義一=農場助手?〕、中島(顕)、犬飼、山口(千)の諸氏御出席さる。

先ず副舎長平川君の司会あり。ついで一同記念祭歌を合唱す。

平川君の挨拶、土井、本間、川原三君の御祝いの辞あり。

先輩、鈴木、犬飼、前川氏の祝辞あり。

鈴木氏の発すにて青年寄宿舍万歳を三唱し、平川君のリードにて宮部先生の万歳を三唱す。かくて我舎第参拾貳回記念祭は終了せり。時に五時。

ついで晩餐会に入る。委員の手になる見事なる料理にて一同快談しつつ愉快地食事を終る。七時より余興を行ふ。此頃より来客徐々に来る。其の主なる芳名は次の如し。

先輩多勢氏、一般新島氏、若宮氏、木村氏(以上大学関係者)。

笹部氏その他無慮五十数名に及ぶ。

余興のプログラムは別紙の如し。

準備等の都合あり予定の十時半より遅れて十一時を過ぎたるは残念なり。余興部の大漁踊

の如きは失敗して成功せるものか。概して成績良好と云うを得べし。

十一月五日

段々と寒くなって来る。未だ手稲の雪は消えず。

十一月六日

雨降り、しとしとと降る。木の葉漸く尽きんとす。

檜葉落葉す。雨に打たれてハラハラと散る。寂しさ云わん方なし。

此の愛淋ひとをしてハイムヴェーに陥らしむ。

十一月七日

朝、ストーブの抽選を行う。ストーブ取付けをなす。いよいよ之で寒さに対する対抗準備も出来上がった。

十一月八日

夕食後ストーブ付属品の抽選を行う。早速ストーブを燃やす事を考える不経済な燃料学者あり。

十一月九日

天気悪し。午後より可成り強く雪降る。寒さにはかに加はる。

十一月十日

天候依然定まらず。ふり？[読めず]ふらず？[同]道路悪き事甚し。

十一月十二日

本日午後六時より亀屋にて記念祭慰労あり。

十一月十六日

文武会音楽部の演奏会、中央講堂に於て午後七時より行わる。例年の如く雨降る。

雨止む。午後八時頃なり。雲はれて満月の？條たる樹間に其の影を影じて甚だ美し。甚だ感傷的の気分となる。

十一月十七日

去年の今月今夜は雪降りしに今年は未だ気温高し。然れども午後より天一面を被いし雲は雪雲の如く見え、降雪近きを思はず。夜??の如く月よし。

記念祭の記念撮影は甚だ芳しき出来に非ず。残念なり。

十一月十八日

嵐模様の空、なり。夜に入りて猛烈に風吹く。

十一月十九日

午前中よりチラチラと間を置いて雪が降ってきた。今日正午の気温四度Cである。可成の寒さを感じず。夜一時雪猛烈に降りしも？実にして止む。一面の薄化粧となる。

十一月廿日

夜に入りて雪チラチラと降り来る。

十一月廿一日

終日曇り模様。時々雪あり。一面白くなる。道路凍りて登校に甚だ便利を感じる。

十一月廿二日

今晚十一月決算を行う。緊縮の結果、食費一人前一日四拾六銭。可成り安く、総計一人当り貳拾貳円拾一銭である。

十一月廿三日

今朝六時頃よりの雪は激しく降りて忽ちにして三四寸となれり。

朝寝の面々雪の降れるを知り顔も洗わず早速スキーを納屋より取出し、朝食もせずスキーにてるフレッシュマン、喜ぶ事又甚だし。終日スキーをなし、尚夜に入るもなす者あり。其の意気と其の熱情に驚嘆にたえたり。夜流れ星またたく。

十一月廿四日 <雪が一尺 電車不通>

昨朝来の雪は積もること正に一尺。忽ちにして電車不通となる。亦憐むべきかな市電よ。月次会の委員左の如く発表あり。委員、寺岡君、清水、安田、吉川君。

十一月二十五日

折からの雪と日曜とにてフレッシュメンの面々スキーを肩に大得意。三角山に出掛ける。安田君の如き最も熱心なり。彼スキーを実際に行はざる以前に已に、open enristiunic 等の The oril {書き取り人は意味取れず}を知る恐れるべきラオリスト成。[意味不明]

十一月二十六、二十七日

この頃にはかに気候ゆるみ、又湿気を感じず。雪解け始めたり。

十一月二十八日 <月次会 何か話をする>

今年最後の月次会を行う。晚餐は例によって牛鍋なり。

先輩の来れるもの少し。僅に多勢氏一人のみ。

広瀬君の動議によりて皆番に席順によりて何か話をする事となる。

今度は例年の試験前の月次会と異なり、試験の事を口にする者なし。

如何なる現象か、兎に角面白き現象なり。

先輩多勢氏はスキーの話をする。非常に形容詞たっぴりに且つローマンチックに話さる。

スキーに対し経験浅き新人輩は、うっとり??で[読み取り不能]聞く。早く試験終了してスキーに出掛けたいと云う気持ち一杯だろうと思う。

先生は先日来朝さる露国の植物学者 [日誌文字空白]氏(失念せり<マクシモヴィチである=日誌解読者>)との対話を話され、その後の露国の学者の口癖の如く言わる。"Lifr is short"なる言葉を引きて若き時より努力さるべき事を話さる。

且つ Life is short, art and science are long と云われ、科学の道に邁進すべき若人をはげまさる。

月次会終了後、来学期委員の選挙をなす。各委員の当選せるもの左の如し。

文芸部 吉川君 1 2 清水君 5

会計部 広瀬君 7 木村君 3

運動部 坪田君 6 安田君 5

食事部 土井君 12 寺岡君 10 安田君 7

衛生部 清水君 8 石君 4

東西対抗のヘボ抜きは東側の連勝。新人対OBはOB大勝す。

十一月三十日

予科は試験施行の予告あり。

十二月二日

試験日割発表。雪雨にて解け道悪し。<3、4日記載無し>

五、六日 此の頃スキーマン、雪なき故スケートに鬱憤を晴らす。<7-9日記載なし>

十二月十日 <靴を盗まる>

夜先輩時田氏来訪。靴をぬすまる。ほんの十数分間の間なり。この種のコソ泥、師走に入ると共に増し来る。此年も [?]つまり、大いに警戒を要する事なり。

十二月十一日

昨晚盗難の厄に逢いたる時田氏の靴、平川君発見す。石君は散歩の帰りに泥助を見たりと今朝の話しなり。泥棒の心理解するに苦しむ。試験目前に迫り皆頑張る。

十二月十二日

今日土木専門部試験開始。蓋し試験の走りなり。温暖なる天候春の如し。雪殆ど消えた？今年の現象は奇々怪々。其の何の理由在るのかを知るに悩む。予科本日授業無し。余す所明日一日なり、大いに頑張るべし。

十二月十三日

流石に今日外出するもの無し。世界大思想全集第三十三回配本さる。夜に入りて雨降る気まぐれなる天候よ。

十二月十四日 <志賀重昂全集を寄付さる>

五時頃には殆ど皆起床せり。平常の寝坊に似ず早起せる者あるも此亦試験の為か？昼食の食卓は騒然として試験の結果につき騒がし。夕食後笹部氏来舎。志賀重昂全集八巻寄付さる。今晚の汽車にて帰省との事。皆の者羨望に絶えざるが如し。

十二月十五日

流石に今朝早く起きたるもの少きは日曜日に安心せるか。只一日にし試験の腰を折らるるは甚だ悪し。空は雪模様たるもなかなか降らなず。雪も緊縮の余波を食いたるにや。坪田、大岩君は活動写真見物に其の余裕振りを示す。雪よふれふれ！！そして試験の早く終る様に

十二月十六日

雨降る。実にいやな天気である。雪もすっかり消えた。試験二日目皆コンデ、コンデを連発す。

十二月十七日

稍時雨、温きて春先に似たり。試験も半ばは過ぎたり。<18日なし>

十二月十九日

本日を以て予科1年農工を残して試験終る。皆喜色満面に溢る。街へ活動写真、早速出掛ける。甚だ現金なり。ピンポンをする音始めてひびく。

十二月廿日

今日で皆試験苦より解放さる。昨日迄ウンウン云いし舎生にも今日一番元気あり。笑うべし。

決算を行う。一日一人当四十六銭。賄へのボーナスとして一円宛。合計二拾一円八拾七銭なり。本年最終にして且つ亦委員最後の務め仕舞なり

白澤に於て慰労あり、木村君朝帰省。けだし帰省のはしりなり。

松竹座に赴くものあり。寺岡君岩内に実習に出発す。

十二月廿一日

雪少々降る。今日になりて降りしをうらむものあり。清水、安田君スキー合宿に十勝へ出

発す。

十二月廿二日

広瀬、坪田、大岩、桜林、大島、樋口、石、吉川君スキー部の合宿に青山温泉に出発す。一日元気旺盛なり。

今後一週間大いに黒くなりてスキーに上達して帰舎される様にシーハイル。

予て病氣にて入院中の金森君帰舎甚だ結構なり。

十二月廿三日

今朝僅かなれども雪降る。各地積雪の報あり。寺岡君帰舎（夕食あり）予定より速きこと二日なりと。岩内は積雪甚だしとスキーマンの羨望する所在り。

廿二日追記 <宮部先生、帝国学士院会員に 我舎の誇り>

我舎舎長宮部先生には今回帝国学士院会員に推薦せられたり。北大に於て第二番目なり。甚だ名誉の極みと云う可し。亦我舎の誇りとする所なり。

十二月廿四日

朝本間君帰省さる。雪チラチラ降る。

十二月二十五日

本日はクリスマスなり。寒気甚だし。静かなる X-mas を迎ふ。

十二月二十六日

本日悪魔のポンドに寺岡君陥る。蓋し氷の堅さを見てスケートせん。君にかく在れり。

十二月二十七日

残留舎生一同（金森君を除く）手稲山に登山を為す。降雪量少くして夏山に登る事なれば甚だ楽し。

ヒュッテに於る昼食は大変なる御馳走？なり、汁を五杯かへたる人有り。皆満腹し頷くを得ざるに至る。一行皆、今日のスキー行に満足す。

午後三時出発す。平川君途中にて足をくじく。帰舎六時なり。

予科対浦和高戦のホッケー戦は八対零にて予科の大勝に帰せり。

学士RC対予科ラグビーは11対8にて予科惜敗す。未だ疲労癒せざると練習不足の為ならんと思はる。

十二月二十八日

平川君、足部の負傷案外にひどく、二三日静養とて、帰京さる事となれり。平川君今日より欠食なり。

今晚餅つきを行う。大部分備えに於て、す。

予科対大阪商大ラグビー戦は13対3にて予科大勝す。朝来雪降る。

十二月二十九日

スキー合宿に赴きし一行中、広瀬、坪田、石、桜林、吉川、樋口君元気にて帰舎す。

石、吉川、大島君はスキーを折れりと。広瀬君は今晚九時にて帰省せり。

十二月三十日 <故石澤達夫氏の追悼会>

晩六時半より故石澤達夫氏の追悼会を行う。未亡人より送られし甚だ結構なる静岡蜜柑をいただく。寄せ書きを表す。

十二月三十一日 <除夜の鐘 ラジオに故障>

土井、坪田、寺岡君、奥手稲へ出発す。今晚は年越しそばの馳走あり。

除夜の鐘を聞かんとするもラジオに故障ありてきこえず。雪はげしく降り始めたり。
今年も大過なく将に暮れゆかんとす。
之を以て筆を擱き来る昭和5年よりは新委員、吉川萬雄君に引き継がんとす。